

山本博士  
還曆祝賀

記念論文集

京都帝國大學經濟學會

昭和九年一月一日發行

# 經濟論叢

第三十八卷第一號

(通卷第二百二十三號。禁轉載)

奉  
呈

山本美越乃先生

執筆者一同

## 目 次

<p>尙書の虞夏書に見はれたる經濟思想</p> <p>酒の專賣に就きて</p> <p>マールクスの認識論原理</p> <p>植民の世界史的意義</p> <p>農業生産<small>に於ける</small>水平的分化と垂直的分化</p> <p>我國工業<small>に於ける</small>小企業の殘存<small>に關する</small>一研究</p> <p>資本蓄積率の差異と固定資本</p> <p>中央銀行兌換準備檢討</p> <p>貨幣需要と貨幣の流通速度</p> <p>植民地時代米國の土地保有制度</p> <p>米國の對政馬投資とその影響</p>	<p>法學博士 田島 錦治 一</p> <p>法學博士 神戶 正雄 二</p> <p>文學博士 米田庄太郎 四</p> <p>文學博士 高田 保馬 三</p> <p>經濟學士 八木芳之助 八</p> <p>經濟學士 大塚 一朗 一七</p> <p>經濟學士 柴 田 敬 二三</p> <p>經濟學士 松岡 孝兒 二六</p> <p>經濟學士 中 谷 實 二九</p> <p>經濟學士 堀江 保藏 二九</p> <p>經濟學士 長田 三郎 二七</p>
--	---

免稅點以下の小額所得者	經濟學博士	汐見 三郎	二四
經營學の基礎概念たる資本、企業及經營	經濟學博士	小島昌太郎	二六〇
世界科學に就て	經濟學博士	作田 莊一	二七六
漁村更生策に於ける問題	經濟學士	蜷川 虎三	二九五
人口粗密の原因觀	法學博士	財部 靜治	三三五
徳川時代における植民的思想	經濟學博士	本庄榮治郎	三三九
ヘーゲル市民社會論と經濟學	經濟學博士	石川 興二	三四九
恐慌と蓄積と植民	經濟學博士	谷口 吉彦	三五九
北海道鰯漁業に現存の漁場貸借關係	經濟學士	岡本 清造	三五四
我國に於ける植民政策學の發達	經濟學士	金持 一郎	四一七
クレルウキアに就いて	農學士	若木 禮	四四〇
山本美越乃博士年譜及著書論文目錄	經濟學士	高木 眞助	四七七

# マールクスの認識論原理

(フォイエエルバッハに關するテーゼに於ける)

米田庄太郎

第一節 緒言、第二節 第一テーゼの考察、第三節 Aktivismus と Erkenntnis と Fragmentsmus 第四節 第二テーゼの認識論原理の眞義

## 第一節 緒言

エンゲルスが千八百八十八年に單行本として出版せる「Ludwig Feuerbach und der Ausgang der klassischen deutschen Philosophie」の附録として、始めて公にせるフォイエエルバッハに關するマールクスのテーゼは、マールクス主義者の立場から見ればエンゲルスが同書の緒言中に述べて居る如くに、「大抵の中には新世界觀の獨創的な芽が含まれて居る最初の文書として甚だ貴重なるものであることは云ふまでもないが、マールクス主義者でなくして純學問的にマールクス主義の諸理論を論究し、其の眞義を究明し批判せんとするものもありても、同テーゼはマールクス主義の起源及び發達を詳しく探究する資料として重要な文書であるに止まらず、マールクス自身の眞意を深く了解する爲めにも甚だ肝要なる文書である。尙ほ同テーゼは其後千九百二十六年 Kijaznow によつて Marx-Engels Archiv, I. Band の中に、又千九百三十二年 Adoratskij によつて Marx-Engels Gesamtausgabe, Erste Abheilung, Band 5 の附録中に、マールクス自身がノートブックの中に書き附けて置いたまゝに公にされて居るから、今日では吾々は同テーゼを一層十分に研究する便宜を與へられて居る。併し私は本論文に於ては、同テーゼ十一ヶ條全體を考究せんとするのでなく、只第二テーゼに於てマールクスが言述して居る彼の認識論の原理に就て、彼の認識論の眞義を少しく論究して見たいと思ふだけである。是れ同テーゼに於てマールクスが自から言述して居る彼の認識論

の眞義は、エンゲルスが *Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft* 及び *Ludwig Feuerbach und Ausgang der klassischen deutschen Philosophie*、即ちマールクス主義唯物論哲學の入門書とも、又或意味では經典の如きものとも見做されて居る處の、哲學上エンゲルスの最とも重要な著書の中に論述して認識論、并に其等の著書に従ふてレーニンが公にせる彼の哲學上の最大著書 *Materialismus und Empirio-Kritizismus* に於て諸家の説を排撃し罵倒しつゝ論述して居るマールクス主義認識論とは、異なる意味に解釋し得られるもの、又解釋さる可きものと思はれるので、私はかねて同テーゼに就て大に興味を感じ、又之を大に重要視して居るからである。そうして早くから同テーゼに就て一論文を書いて見たいと思ひながら、只時折に私の講義中で一寸觸れるくらいに止まつて居たのであるが、本年春、米國ニューヨーク大學哲學助教授 Sidney Hook が公にせる著書 *Towards the Understanding of Karl Marx* の中に、主として第二テーゼによりて、マールクス自身の認識論とエンゲルス及びレーニンの認識論との差異を論述して居るのを見て、此の問題に關する私の興味に益々強まり、此處に山本教授の遺曆紀念號として本號が公にされるに當つて、此の一小論文を寄稿することとしたのである。

## 第二節 第一テーゼの考察

私は前節緒言中に述べし如く、本論文に於ては只第二テーゼに於けるマールクスの認識論の根本原理の眞義を、少しく考究して見たいと思ふだけであるが、併し其の眞義を究明する爲めには先づ第一テーゼを考察することが肝要であると思ふ。是れ私は第二テーゼの眞義は第一テーゼの眞義と照らし合せることによりて、始めて十分に究明し得られるものと考へるからである。

今第一テーゼに於てはマールクスは、從來の一切の唯物論は只直觀するだけの、或は只直觀するだけの受動的な唯物論であるに止まるものとして之を非難し、そうして新たに實踐的な唯物論を建設せんとする主意を簡單に言述して居るのであるが、其の全文は左の如くである。

「一切の是れまでの唯物論（フォイエルバッハのも一緒に含めて）の主要なる缺點は、對象、現實態、感性が只客觀の或は直觀の形式の下で把捉されるだけに止まり、感性的に人間的である活動、實踐としては、主觀的には把捉されて居ないと云ふことである。されば活動的方面は唯物論とは反對に、抽象的に、觀念論——云ふまでもなく現實的、感性的活動があるがまゝのものとしては知識して居ない處の——によりて發展されたのである。フォイエルバッハは感性的な——思想客觀（思想事物）から現實に區別されたる客觀（事物）を欲求して居る。併し彼は人間的活動其物を對象的活動としては把捉して居ない。されば彼は基督教の本質に於ては、只理論的態度のみを純真に人間的な態度として考察するだけに止まり、之れに反して實踐は只夫れの穢ない猶太的現象形式に於て把捉され、固定されて居るだけである。かくて彼は革命的活動、實踐的批判的活動を理解して居ない」。Mark-Engels Gesamtausgabe, Erste Abteilung, Band 5, S. 533.

右のマルルクスの言述は甚だ簡單であるが、哲學史上から考察すると、其の眞理價值如何は別としても、甚だ興味ある企圖を表示するものにして、大なる哲學史的意義を有するものと思はれる。併し此處では其意義全體に互つて考察する暇はないから、只第二テーゼの眞義を了解する爲めに、特に必要と思はれる範圍内に於て考察するだけに止める。

今右の言述によりて考ふれば、マルルクスが、千八百四十五年頃、是れまで大に影響されて居たフォイエルバッハを乗り越へて、彼獨特の哲學的立場を始めて確立せんと企だてた際に、彼が



従來の一切の唯物論に對して最も不滿を感じたのは、或は夫れの主要なる缺點と認めたのは、後にエンゲルスが強調して居た如く、夫れの器械論的、器械主義的方面ではなくして、夫れの直觀的、觀照的な方面であつたこと、かくて彼が新たに建設せんとする彼獨特の新唯物論の根本的特徴として、彼自身が先づ特に強調せんとしたのは、彼の新唯物論は辨證法論的であると云ふことではなくして、實踐主義的であると云ふことであつたことが、推察されるのである。そうして此處に彼が従來の一切の唯物論、舊唯物論は直觀的、觀照的であるとして非難して居るのは、つまり夫れは人間を本來受働的な存在であると認め、人間の本來の能働性或は能働的活動性を認めない、或は洞見して居ないが爲めであり、又彼の新唯物論が實踐的であることを大に強調して居るのは、つまり夫れは人間の本來の能働性或は能働的活動性を根本的に重要視することを意味して居ると思はれる。此の事は彼が第三テーゼの中に、「圓境の變化及び教育に關する唯物論的學説は、圓境が人間によりて變化されねばならぬこと、及び教育者自身が教育されねばならぬことを忘れて居る」と述べて居るのを見ても明白であると思はれる。要するにマールクスは従來の一切の唯物論は、本來受働主義であると認めて之を排斥し、そうして唯物論を能働主義、活動主義 *Aktivismus* に結び付け、或は活動主義的に解釋し、以て一の活動主義的唯物論 *ein aktivistische Materialismus* 或は一の唯物論的活動主義 *ein materialistische Aktivismus* と稱せらる可き一の新しき哲學を、建設せんとしたのである。尙ほ彼は哲學に於て、如何に能働主義、活動主義を重要

視したかは、第十一テーゼに於て、「哲學者は世界を只種々に解釋しただけであるが、肝要なるは世界を變化することである」と、述べて居ることによりて察知される。そうして私は哲學史上に於けるマールクス特有の意義は、即ち其の唯物論と能働主義或は活動主義とを結合し融合せんとした點に於て、認めらる可きものと考へて居る。是れ哲學史上に於て、古來唯物論哲學は一般に本來受働主義的なものとして、即ち人間を本來受働的なものと見るものとして建設され、發達して居り、之れに反して能働主義、活動主義即ち人間を本來能働的活動的なものと見る見地は、常に觀念論哲學に附着して、或は夫れの中に含まれて發達して居たのであるが、然るに今能働主義、活動主義を觀念論哲學から切り離して、之を唯物論哲學に結び付け、始めて意識的計畫的に、一の活動主義唯物論或は唯物論的活動主義哲學を建設せんとした人は、實にマールクスであると思はれるからである。そうしてマールクスが千八百四十五年頃から新たに建設せんと企だて始めた彼獨特の哲學の根本的主旨は、活動主義を觀念論から學び、しかも之を觀念論から切り離して、唯物論に結び付けることであつたと云ふことは、上に述べし第一テーゼの中にも明かに指示されて居ると思はれるので、彼は其の中に「されば活動的方面は唯物論と反對に、抽象的に觀念論によりて發展されたのである」と云ふて居るのである。

私は右に述べし如くに、マールクスは彼の新唯物論の創説の始めに、第一次的に最も重要視して居たのは、實踐的であると云ふこと、能働主義的、活動主義的であると云ふことであつたと

考へるのであるが、其の後の彼の學說の發展に於ても、彼の最中心的思想はヤハリ實踐の思想、活動主義の思想であつたと思はれる。そうしてマールクス主義唯物論の最根本的特質を辨證法論的であると云ふことに於て認めんとする見解は、マールクス自身の見解であるよりは、寧ろエンゲルスの見解であるのではあるまいかと思はれる。と云ふも私は決してマールクスは辨證法を重要視して居なかつたと考へるのでない。只マールクス自身の唯物論に於ては、辨證法は如何に重要視されて居たとしても、夫れは決して彼自身の唯物論の最根本的或は最中心的原理としてではなく、其の最根本的或は中心の原理としての實踐或は活動主義の原理に従屬するものとして、重要視されて居たのであると考へるだけである。尙ほ私の見る所では(夫れは誤つて居るかも知れないが)、マールクスが意識的計畫的に、實踐或は活動主義と辨證法とを結び付け、實踐とは即ち辨證法的活動を意味するものであると云ふ様にハツキリ解するに至つたのは、早くとも千八百五十年代の中頃以後のことではあるまいかと思はれる。かく云ふは少し大膽すぎる推察であるかも知れないが、とにかく私はマールクスは新唯物論を建設し始めた頃には、まだ實踐と辨證法との間に必然的連結が存立して居るとはハツキリ見定めては居なかつたので、後に至つて其の連結をハツキリ見定めるに至つたのであらうと推察して居るのである。此處に其の理由を詳しく述べる暇はないから、只極簡單に其の一般を述べるだけに止める。

マールクスは千八百七十三年に出版された資本論第一卷第二版の緒言中に「私は殆んど三十年前、ヘーゲルの辨證法がまだ

時の流行であつた頃に、夫れの神秘化する方面を批判した」と述べて居る。そうして千八百七十三年から殆んど三十年前と云へば、千八百四十三、四年頃に當るのであるが、彼は千八百四十三年三月から八月までに書き下して置いたと云はれる *Kritik der Hegelschen Staatsrechts* の中に、明かにヘーゲルの辨證法の神秘化する方面即ち觀念論を批判し、且つ實際上觀念辨證法を現實辨證法否な唯物辨證法に轉化して運用する跡を示して居る。又千八百四十四年の獨佛年誌中の論文 *Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie* に於ても同様である。尙ほ千九百三十一年に *Unter dem Hammer des Marxismus* に於て、又千九百三十二年、*Marx-Engels Gesamtausgabe, Erste Abtheilung, Band 3* に於て、近頃始めて公にされた彼の千八百四十四年の手稿 *Kritik der Hegelschen Dialektik und Philosophie überhaupt* には、彼は今日までに公にされた彼の著作中で、直接にヘーゲル辨證法の神秘化する方面、即ち觀念論的方面を最も詳しく批判して居る(未完成ではあるが)。更に千八百四十五年に出版されたが、併し既に千八百四十四年の冬に書き上げられて居たと云はれる *Die heilige Familie* に於ても、ヘーゲルの觀念論は深刻に批判されて居る。要するにマールクスは資本論第一卷第二版の緒言中に述べて居る如く、千八百四十三、四年頃にはヘーゲル辨證法の神秘化する方面、即ち觀念論的方面を極度に批判して居たのである。尙ほ又實際上ではヘーゲル辨證法の「合理的眞髓」を洞見し、觀念辨證法を唯物辨證法に轉化して運用して居たことも認められる。併し辨證法的方法として觀念辨證法を唯物辨證法に改造する方法的或は論理的理論に就ては、意識的計畫的にはまだ全く論述して居ないと思はれる。

ヘーゲル辨證法に對するマールクスの同様な態度は、更に彼の千八百四十五年及び四十六年間の著作に於ても見出されるのであるが、同年間の著作に於て先づ注目すべきは、*フオイエルバッハ*に關する *テーゼン* 及び *Die deutsche Ideologie* 中の *フオイエルバッハ* 論に於ては、彼は辨證法と云ふ語を一度も用ひて居ないことである。そうして *Die deutsche Ideologie* の他の諸部分に於ても彼は辨證法に就ては別に論じて居ない、又時に折り夫れに論及する場合には、やはり只其の觀念論的方面を排斥するだけに止まつて居る。尙ほ此の問題に關して、早い時代の彼の著作中最も注意すべきものと思はれるのは、千八百四十七年の著作 *La misère de la philosophie* 第二章、第一節、「方法」であるが、(但し其處でマールクスはヘーゲルの辨證法を経済學に應用して、新しき經濟學、或はマールクスの云ふ「經濟學の形而上學を建設せんとするブルードンの方法を、詳しく又深刻に批判して居るのである) 夫れによりて吾人はマールクスはブルードンとは異なつて、ヘーゲル辨證法的方法的論理的眞髓を深く了解して居たこと、又ブルードンは其の眞髓を誤解或は曲解して居ると云ふ彼の批判の正當であることを學ぶのであるが、併しヘーゲル辨證法其物に彼の加へて居る批判は、やはり其の觀念論的方面に關するものであるだけである。即ち彼は

左の如くに論じて居るだけである。「かくてヘーゲルにありては、生起せる又尙ほ生起する總てのものは、まさしく彼自身の思惟の中に起る處のものである。かくて歴史の哲學は只哲學の歴史、つまりは只彼自身の哲學の歴史に外ならぬ。時間の順序に従ふての歴史なるものは全く存在せず、只單に理性に於ける觀念の繼起が存在するだけである。ヘーゲルは思想の運動を手段として世界を構成し得ると信じて居る。併し彼は只各人の頭の中にある思想を組織的に組み換へ、絶對的方法に従ふて分類して居るだけに過ぎないのである。」

然らばマールクスが、ヘーゲル辨證法の論理的方法的真髓を、觀念論的基礎から切り離し、唯物論の基礎の上に唯物辨證法として、意識的計畫的にハッキリ築き上げんとするに至つたのは何時頃であらうか。それは多分彼が千八百五十九年に公にせる著作 *Vor Kritik der politischen Ökonomie* を準備しつつあつた頃であらうと思はれる。と云ふのは、彼は同書の準備の進捗しつつあることをエンゲルスに通知して居る千八百五十八年一月十四日附けの書簡中に左の如く述べて居るからである。「本書の仕上の方法に就ては、僕が偶然なことで (*Freilich!*) かもと *Parkman* が所藏して居たヘーゲルの著作數冊を見附けて、僕に贈物として送つてくれた)、ヘーゲルの論理學に再び目を通したことが僕に大變役に立つた。若し何時かかゝる仕事に再び力を注ぐ時がくるならば、僕はヘーゲルが発見したが、併し同時に神秘化して仕舞ふた方法に於ける合理的真髓を二三印刷全紙に書き上げて、一般の人々が理解し得る様にして見たいと大に望んで居る。」

右のマールクスの言葉によりて、吾々は是れまでヘーゲルの辨證法を批判すると云へは、専ら夫れの觀念論的方面即ち彼が神秘化する方面と稱して居たものを批判するに止まつて居た彼が、「經濟學批判」の著作に従事して居た際に、偶然なことでヘーゲルの論理學を再讀し、方法としての辨證法の論理的眞髓を改めて深く洞見して、之を唯物論的に改造し、唯物辨證法を築き上げんと計畫的に努力して來たこと、又夫れが爲めに一の著書を公にせんとする念願をも起して來たことを、學び得るのである。そうして若し其の後彼がかゝる著書を書き上げる時を得たならば、恐らくは其の中には彼は唯物辨證法の論理學或は方法論を、大體上に於てなりとも論述したのであらうと思はれるが、まだ彼の遺稿にかゝる著作の遺稿が発見されたことを聞かないのは遺憾である。

私は大體上右に述べしが如き事情によりて、マールクスは實踐と辨證法との必然的連結をハッキリ見定めるに至つたのであらうかと考へて居るのであるが、尙ほ私は此處に隨手に注意して置きたいのは「經濟學批判」出版後に於ける、ヘーゲルに對するマールクスの態度の變化して來たこと、又彼に従ふてヘーゲルに對するエンゲルスの態度も變化して來たことである。マ

ールクスは千八百四十三年頃からフオイエルバツハの影響によりて斷然唯物論に轉向して以來、ヘーゲルに對して常にとつて居た態度は、獨逸觀念論の權化としてヘーゲル哲學を非難し、排斥する反ヘーゲルの態度であつたが、「經濟學批判」の準備の際、上に述べしが如き偶然な事情で、ヘーゲル論理學を再讀して、彼の辨證法の所謂合理的眞髓を深く味ふて以來、ヘーゲルに對する右の態度が段々に變化して來たと思はれる。そうして其の變化は遂に資本論第一卷第二版の緒言中に見出される如く彼自から再び自分はヘーゲルの門人或は學徒であると公言するまでも至らしめたのである。「然るに私が資本論第一卷を仕上げたまきしく其の頃では、今や教養ある獨逸の牛耳をとつて居る、氣六かしき、不遜な、横柄な、凡庸な亞流學者達は、大膽なるモーゼス・メンデルゾーンがレッツシングの時代にスピノツアを取扱へる如くに、即ち死んだ大としてヘーゲルを取扱ふて大に得意になつて居た。されば私は其の大思想家(ヘーゲル)の門人或は學徒であると自から公言し、そうして價值論の章に於てはワヅと彼特有の表現の仕方をも其處此處でまねたくらひである。但し資本論第一卷の價值論は同卷第一版の緒言の始めに、マールクスが述べて居る處によりても知られる如く、「經濟學批判」に於て大體上既に論述されて居るものである。かくてRizanowの云ふ、マールクスの再びヘーゲルへの Hinwendung は、「經濟學批判」の準備中に起れるものであることが察知されるのである。Max-Jengels Archiv, II, Band, S. 122.

私は大體上右に述べしが如くに考へて、マールクスの再びヘーゲルへの Hinwendung は、彼が「經濟學批判」の準備の際に、偶然ヘーゲルの論理學を再讀したことによりて、改めて辨證法の眞義を深く了解し、そうして意識的計畫的に唯物辨證法を作り上げ、又之を實踐と必然的に結び附け、人間的實踐とは辨證法的人間活動を意味するものと考へるに至つたのであらうと、推察するのである。

却説私は以上述べし如くに、マールクスが千八百四十五年に彼獨特の新唯物論の土臺を据へ就けた際には、夫れの根本的特質を實踐的であると云ふこと、能働的活動的であると云ふことに於て求めたのであると考へ、又其の實踐の思想、能働的活動主義 Aktivismus の思想を彼自身明か

に述べて居る如くに、觀念論から學んだのであると考へ、そして觀念論の活動主義の思想を、精神的なるものから感性的なるものに轉化することによりて、之を傳來の唯物論に結び付け、かくて實踐的或は活動主義的唯物論とか、又は唯物論的實踐主義或は活動主義とか稱せらる可き、全く新しき哲學的一方針を立てたと云ふことが、即ち彼の哲學史上の特有の意義であると認めるのである。併し夫れと同時に、マールクスのかゝる哲學的新方針に對して哲學上甚だ重大なる根本的問題が起つてくると思はれる。夫れは即ちタトヒ觀念論の活動主義の思想を、精神的なるものから、感性的なるものに轉化して唯物論に結び付けるとしても、それで果して全然觀念論的要素を含まない純粹な唯物論が建設し得られるであらうかと云ふ問題である。併し此處で特に此の問題を論究する暇はないから、只第一テーゼに於ける實踐的唯物論の最根本原理の言述に關しては哲學上直ちにかゝる問題が呈出されると云ふことを指示するだけに止め、是れより先づ第一テーゼの眞義に従ふて第二テーゼの眞義を解釋し、次に之を批判するに當つて、認識論上から自ら呈出されて來る同様な問題を論究する際に、右の問題を其の中に含めて一緒に考察することとする。

今是れより、第一テーゼに於てマールクスが新たに建設せんとせる唯物論の最根本的特質は、實踐的主義、能働的活動主義であると云ふことであると認め、そして夫れに従ふて第二テーゼに於て彼が論述して居る認識論の原理を解釋せんとするに當つて、尙ほ先づ考察して置きたい一問

題がある。それは哲學史上に於ける、又現代哲學上に於ける Aktivismus と Aktualismus と Pragmatismus との關係である。併し此の論文の頁數は限定されて居るので、此處に此の問題を詳しく論述することは出来ないから、只當面に必要な限りに於て、ほんの一般的に論述するだけに止める。

### 第三節 Aktivismus と Aktualismus と Pragmatismus

私は此處では只簡單に活動主義、現實主義及び實際主義の一般的概念と、三者の相互關係の一般とを述べて、フオイエルバッハに關するテーゼンに於ける、マールクスの實踐的唯物論の最根本的特質と、認識論原理との關係を、哲學史的に了解する一指針としたいと思ふのであるが、先づ活動主義の一般的概念を述べて置く。

活動主義は哲學史上又現代哲學上、現實には種々様々な形態に於て發達して居る。そうして大體上から見るも、少なくとも形而上學的活動主義、心理學的活動主義及び一定の文藝運動を意味するものとしての文藝的活動主義等が、區別し得られると思はれるが、此處では主として形而上學的活動主義に就て少しく述べるだけに止める。

形而上學的活動主義も實際に於てはヤハリ種々様々な形態に於て發達して居るが、今其の最も一般的な特質を抜き出して、其の一般的概念を規定すれば、要するに夫れはつまり、精神に於



ける活動要素或は能働的なるものを特に強調して、一切の形而上學的問題を解決せんとする哲學的立場或は哲學的方針を、意味するものであると云ひ得られる。尙ほ此の哲學的立場或は方針に於て發達して居る一の著しき特徴と認められるものは、知識及び科學は如何に重大なる夫れ自身價值を具有するにせよ、決して絶對的な終極な目的ではなく、つまりは文化理念及び人類理念を目標として、個人的及び社會的生活を合目的に形成する一の手段に外ならないものと見る見解であると思はれる。そうして吾々は哲學史上に於ては此の活動主義の比較的にも徹底せる代表的哲學者をフイヒテに於て見出し、又現代哲學に於ては之をオイケンに於て見出すことが出来る。

フイヒテは倫理的行爲はまさしく外界の存在の基礎にして、外界は只吾人の義務の感覺化されたる材料に外ならぬもの、精神的世界は能働的に已れ自から築き上げるものであると論じ、又オイケン<sup>(1)</sup>は精神生活は常に已れ自身から益々より高き現實を發展されると論じて居た。併し汎く活動主義的と稱し得られる哲學者は、殊に現代の哲學者の間には甚だ多いと思はれる。

次に Aktualismus の一般的概念を述べて置く。Aktualismus は一般に現實說と譯されて居るが、併し我國では普通に現實主義と云へば Realismus を意味するもの様に解されて居るから、Aktualismus を現實說と譯する場合には、其の眞意が誤解され易い恐れがある。それで私は言葉に囚はれずに直ちに其の眞意を表示する爲めに、之を生成主義とか流動主義とか譯して置く方がよいかと思ふ。(但し Aktualismus を現實說と譯する人々は、Realismus を寫實主義と譯する人々は、Aktualismus を現實論とか、實在論とか譯して兩者を區別せんとして居る)と云ふのは Aktualismus とは一般的には、現實態の一種或は現實態一般は一の實體的、靜在的存在に於て存立するのでなく

活動に於て、生成に於て、流動に於て、過程に於て成立するものと見る哲學的立場、方針或は學說を意味するものであるからである。そうして生成主義或は流動主義 *Actualismus* も亦實際には種々様々な形態に於て發達して居るので、少なくとも先づ形而上學的生成主義と心理學的生成主義とが區別されるが、此處では主として前者に就て考察するだけに止める。要するに形而上學上に於ては、生成主義は一切の現實態は何處でも亦何時でも靜止しない生成であるとして把握する見解、一切の現實態は思惟には物或は實體として現はれて居るが、併し結局は絶對的に固定して居る荷負者に結び附けられないで、夫れ自身獨立である處の活動の流出であるとして把握する見解を意味するのである。かくて物は只一の永久的、創造的な發展の諸契機、横斷面、結晶點に外ならず、存在は只生成の一の特殊な場合、只相對的に安定せる生成に過ぎないものと考へられて居る。古代哲學にありては、*Moralis* は生成主義の代表的哲學者であり、近世哲學にありてはフイヒテ、ヘーゲル、ショペンハウエル等も夫れ夫れの意味にて生成主義者であると云ひ得られ、現代哲學に於てはデイルタイ、ベルグソン、ウント其他多數の著名なる哲學者が、夫れ夫れの意味にて生成主義者と稱し得られるのである。

終りに實際主義 *Pragmatismus* の一般的概念に就て少しく述べて置くが、實際主義も生物學的、心理學的、主意主義的、目的論的、活動主義的等の諸形態に於て發達して居るので、そうして其等の諸形態に於て夫れ夫れ特殊な意味をも併有して居るが、一般的に云へば、實際主義とは要するに知識及び學問一般を生活或は生命、行爲、實踐と直接に結び附け、一切の思惟及び認識を何れかの目的に向けられ、即ち實踐や行爲の目的に又思惟其物の目的にも向けられ、關心、慾望、

意志傾向等に源を發するものとして考察し、生活及び行爲に役立つ、之を助成する效力に従ふて一切の思惟及び認識を評價する哲學的立場或は方針を意味するものである。かくて實際主義は常に思惟、概念、判斷、假説、理論等の作業價值、理論的實踐的效果性を問題とし、思惟及び認識つまり學問は自己目的ではなく、生活或は生命、夫れの維持及び發達の爲めの手段であると見るのである。プラグマチズムは其の源を遠く古代印度哲學や古代希臘哲學に發し、そうして中世紀哲學及び近世哲學を通じて、種々なる形態や種々なる度合に於て現はれて居たが、獨立なる一の哲學的立場或は方針として盛んに主張されて來たのは、現世紀に入りてからである。殊に米國に於て大に發達し、一時は米國民特有の國民哲學であるとも稱せられて居た。併し種々なる度合又種々なる形態に於て、歐洲諸國の現代哲學に於ても發達して居るので、確かに現代哲學に於ける世界的な一立場或は方針と見做し得られるものである。

却説活動主義、生成主義或は流動主義、及び實際主義の一般的概念は、大體上右に述べしが如くに規定する可きものと思はれるが、今此等の三主義或は三つの哲學的方針(立場)の間には、詳しく吟味して行くと、論理的に親密なる種々の關係が存立することが見出されるのみならず、更に哲學史を通じて、又現代哲學に於ても、此等三主義の總て又は其の中の何れかの二者が、實際上同一の哲學者或は哲學に於て、相互に親密に結合し連結して現はれて居ることが、屢々發見されるのである。そうして私は此の事は哲學史的研究に於て、重要な一現象として注目する可きものと考へて居る。併し此處で此の問題を詳しく論述する暇はないから、只主として現代哲學に就て若干の實例をあげて三主義の關係の一斑を指示するだけに止めるが、私は右の三主義が何れかの度合に於て三つとも相結合し相連結して現はれて居る哲學者の實例として、少なくとも Fichte

Nietzsche, Bergson, Schiller, Vaihinger, Mach, Ostwald 等が擧げ得られると思ふ。又特に活動主義と實際主義との二者が、親密に相結合して現はれて居る哲學者の例としては、Goethe, James, Blondel, Jerusalem 等の人々が擧げ得られると思ふ。そうしてマルクスは前者の部類に屬する哲學者の一人であるので、要するに彼は前節に於て述べし如くに、從來の一切の唯物論が直觀的、觀照的、受働的であるのを非難し、觀念論から活動主義、能働主義、實踐主義の思想を學び、之れに重大なる改變を加へて、唯物論に結び附け、以て實踐的活動主義的唯物論を創説したのであるが、更に彼が世界の本體と見る物質を、活動主義の主旨に従ふて本來運動する物質であると見ることによりて、生成主義或は流動主義をやへり觀念論からとり入れ、之れに重大なる改變を加へて唯物論的流動主義或は生成主義を主張したので、かくて彼は認識論に於ても、自から實際主義を主張するに至つたのである。

私は甚だ簡單ながら以上述べし如くに、汎く哲學史上から考察して、形而上學に於て活動主義及び流動主義或は生成主義を唱へて居たマルクスが、認識論に於て實際主義を主張して居たのは、當然であることを先づ指示して置いて、是れより第二テーゼに於ける彼の認識論の原理の眞義を究明したいと思ふ。

#### 第四節 第二テーゼの認識論原理の眞義

今マールクスが第二テーゼに於て述べて居る彼の認識論の根本原理と云ふは左の如きものである。

「對象的眞理は人間的思惟に到達するや否やと云ふ問題は、理論の問題ではなくして一の實踐的問題である。實踐に於て人間は眞理、即ち彼の思惟の現實性及び力、此岸性を證明せねばならぬ。實踐から切り離されて居る思惟の現實性又は非現實性に關する論争は、一の純スコラ哲學的問題である」(『Marx-Engels Gesamtausgabe, Erste Abteilung, Band 5, S. 534. . . .

吾々は右の言述によりてマールクスの認識論は、先づ實際主義的 Pragmatisch なものであること、又其事は前説に於て述べし處の、活動主義及び流動主義或は生成主義と實際主義との關係から考へて、當然であることが覺られるのである。併しマールクスは活動主義も亦流動主義或は生成主義も、共に觀念論から學びながら、之を唯物論的のものに改造したのであるから、彼の實際主義も亦ヤハリ唯物論的に改造されたもの、即ち唯物論的實際主義であらねばならぬ。然らば唯物論的實際主義としての彼の認識論原理の眞義は如何なるものであるか。

今前節に於て述べし處によりて學ばれる如く、活動主義は哲學史上本來觀念論に於ける一の方針或は立場として、又は少なくとも觀念論を全然排斥して純粹なる唯物論を主張するのではない處の哲學に於ける一の方針或は立場として發達し、且つ現代哲學に於ても本來同様な一の方針或は立場として發達して居るものである。されば之れと連結して、或は之れの一歸結として認識論上

發達して居る實際主義は、認識論上の一方針として、本來認識主觀の、或は認識主體としての人間の能働性、活動性を前定して居るものであらねばならぬ。要するに形而上學上の活動主義が、精神に於ける活動契機、能働的なるものを強調する形而上學上の一方針であるに相應して、之れと結び附いて居る認識論上の實際主義も亦認識主觀としての精神の能働性、活動性を前定して居るものである可きである。さればマルルクスの實踐的唯物論は、唯物論である以上、云ふまでもなく人間を本來精神的存在とは認めず、隨ふて根本的には精神の能働性、活動性を認めず、そうして人間を本來感性的存在と認めるものであるが、併し活動主義、實踐主義である以上、感性的存在としての人間の活動性、能働性、人間の感性的の能働性、活動性を強調するものであるから、之れに結び附けて認識論上彼が主張する實際主義も亦之れに相應して、認識の作用に於ける主體としての感性的人間の能働性、活動性、つまり人間の感性的の能働性、活動性を前定するもの、或は肯定して居るものである可きである。そうして實際上認識の作用に於ける感性的人間、或は感性的の能働性、活動性を肯定するのが、即ちマルルクスの認識論の根本的思想であると思はれるのである。尙ほ深く推し究めて行けば、マルルクスが彼の實踐的唯物論の最根本原理として立てて居る思想、即ち感性的人間は本來能働的、活動的なものであると認める思想は、認識作用に於ける感性的人間の能働性、活動性の思想を、本質的に含藏して居るものと考へなければならぬと思はれる。是れマルルクスの云ふ感性的人間の能働性、活動性なるものは、決して感性的人間は只

外界の刺激に對して無意識的、盲目的に反動することや、衝動的に又は感情的に反動することを意味するだけのものでなく、感性的人間の能動的な認識作用に基いて反動すること、即ち合理的に活動することをも、意味して居るものであるからである。かくてマールクスの認識論に於ては彼の解するが如き意味での感覺は、單に外界の事物の其の儘の摸寫、反映、映像を意味するだけの、純受動的なものではなく、少なくとも何れかの度合に於て能働性、活動性を具有するものと解せねばならぬ。そうしてかく解するのが、又彼の真意であつたと思はれるのである。

然るに今第二テーゼに於て述べられて居るマールクスの認識論の原理の眞義を、右に述べしが如くに解釋し、彼は認識の作用に於ける認識主體としての感性的人間の能働性、活動性を肯定し居たと認め、かくて彼は感覺を單なる受働作用とは考へず、一定の能働性を具有するものと解して居たと認めると、第一節中に述べし如くにエンゲルスが「ルトヴィヒ・フォイエルバッハと古典的獨逸哲學の終末」即ちマールクス主義哲學の入門書とも亦、夫れの一種の經典とも見做されて居る著書に於て論述して居る認識論の根本思想、又之れに従ふてレーニンが彼の哲學上の最大の著書「唯物論と經驗批判論」に於て諸家の説を排撃し罵倒しつゝ論述して居る認識論の根本思想は、マールクス自身の認識論の根本思想とは合致しないものとなつてくる。つまりエンゲルスもレーニンもマールクスの認識論の根本思想を正當に了解せず、隨ふて彼等の、殊にレーニンの政治的活動主義の根本精神と認識論の根本思想とは相調和せず、矛盾して居ることになるのである。此事

に就ては私は此處に先づ米國ニュー・ヨーク大學哲學助教 Sydney Hook が、本年春公にせる著書 *Towards the Understanding of Karl Marx* 中に論述して居ることを述べて置く。但しフークは今日米國に於けるマールクス主義學者の一人、殊にマールクス主義唯物論哲學の精究者として知られ、之れに關する若干の論文を同國の有力なる哲學雜誌上にも公にし、又 *The Encyclopaedia of the Social Sciences*, Vol. 10 (最近發刊の卷) 中の「唯物論」も彼の筆になれるものである。さうしてフークは同書に於て、先づマールクスが「フォイエエルバッハに關するテーゼン」及び「獨逸イデオロギー」に於て述べて居る認識論と、エンゲルスが「ルドヴィヒ・フォイエエルバッハと古典的獨逸哲學の終末」に於て述べて居る認識論との差異に就て、左の如く述べて居る。

「フォイエエルバッハに關するテーゼン」及び「獨逸イデオロギー」等の著作に於ては、マールクスは彼のヘーゲルの傳統を忠實に守りて、人間の感覺及び思想を、動物的有機體に於ける圍境の衝擊の受働的自動的結果と見る一切の器械主義的唯物論に粉碎的宣告を下して居た。彼は一切の以前の唯物論の主要なる缺點は、意識的活動一般及び特に文化的選擇作用の説明に對する夫れの無能力であつたと主張した。フォイエエルバッハの愛の政治學の政治的受働主義は、感覺は客觀的世界の直接形像、知識を産む炭素複寫的報告であると云ふ彼の信仰に、其の一根柢を有するのであつた。マールクスにあつては、感覺は實踐的感性的活動の諸形式であつた。感覺は知識ではないが、併し活動に於て夫れ自身で完成する知識への刺激であつた。感覺は夫れ以外の何物でもあり得なかつた。然らざれば社會的相互作用、夫れなくば世界は變形され得ない處の社會的相互作用は不可能となる。若し人間が人間を制約する圍境の上に反動し、之を變化することが出來ないならば、社會的革命は最早人間の活動の一形式として認められることが出來ず、合理的力學或はエネルギー學の或る圖式に於ける偶然事に歸せられる。併し一切の社會的活動及び變化は人間の心中にある觀念によりて媒介されて居る。されば觀念は受働的心像ではあり得ない。觀念は能動的活動的道具であらねばならぬ。エンゲルスは彼の「ルドヴィヒ・フォイエエルバッハと古典的獨逸哲學の終末」に



於て、辨證法的唯物論の唯物論的基礎を保護せんと企てて居るに當つて、マールクスの認識論に於ける此の實踐的要素の地位及び重要性を十分に強調して居ない。彼はフオイエルバッハの粗雑な公式を受け容れた。そうして其の公式に従へば感覺は外界の模寫及び映像であるのである。併し若し感覺は只反映に過ぎないものであるならば、觀念が事物を變形し或は革命するを助けると云ふことが、如何にして可能であるかは到底説明され得ない。エンゲルスは、かゝる説明を敢て企てずにはフオイエルバッハの粗雑な公式を其の儘に受け容れて居たのである。エンゲルスは感覺を知識への實質の手がかりとは見ずして、知識を感覺と同一化し、そうして真理を此等の感覺と外界との間の合致として定義して居る。併しかゝる假設に於ては、人間は如何にして彼等の感覺の覺術的圈を脱却し得るか、如何にして彼等の感覺が外界と相應するかを決定し得るか、實際に於て如何にして外界と云ふ様なものが存在することを知り得るかは、一の神秘となるのである。

なるほどエンゲルスは實驗及び實踐に訴へることによりて此の神秘を解消しようとして企てた。併し抑々實驗なるものは、彼が理解して居た如く、再び直接知識の場合であると認めらる可き感覺に歸着するのであるから、彼は「實驗からの議論」を用ひて攻撃したヒュームの近代的隨從者よりも、眞理及び存在の非感覺論的標準に、一步もより多く近づいて居なかつた。マールクスにありては實驗及び實踐に訴へることは正當であつた。是れ彼はヘーゲルの「精神の現象學」の緻密な一研究者として既に知識の直接性の信仰を放棄して居たからである。マールクスは形而上學的唯物論に反對するものとして、獨逸古典哲學の主要なる貢獻は、夫れが心の能働或は活動を強調する點にあると考へ、そうして夫れの觀念論的曲解を矯正したのである。次にフークは、レーニンの政治的活動主義と彼の認識論との不調和に就て、左の如く論じて居る。

甚だ奇妙にもレーニンは、彼の政治的活動主義及び夫れの根柢に存する處の、「何が爲さる可きか」に於て論述されて居る、相互作用の動的哲學と、彼の「唯物論と經驗批判論」に於てきほど熱心に彼によりて辨證されて居る知識の器械的對應説とは、到底調和され難きものであることを看過して居る。此の認識論に於ては、彼は「感覺は事物の模寫、寫眞、模像及び鏡面反映である、」「そうして心は認識作用に於て能働的でない」と云ふ彼の言述に於て、言葉通りにエンゲルスに追隨して居る。彼は若し何人でも、(1)心は神経系統及び過去の歴史の總てによりて制約されて、一の能働的因素として認識の作用中に入り込むと考へるならば、夫れよりして當然(2)心は夫れ自身の腦髓をも含めて、存在の一切を創造すると信じなければならぬ」と信じて居る様である。若しそうであるならば夫れは紛れもない觀念論であり、そうして觀念論は宗教及び神を意味するも

のである。併し命題(1)から(2)へ進み行くことは、想像し得られるだけ最も明白なる不合理の推論である。レーニンは社會の革命の理論及び實踐としての彼のマルクス主義の概念の爲めに、勿論の事として、知識は一の能動的事柄であること、物質と文化と心との相互作用が行はれる一の過程であること、そして感覺は知識ではないが、併し知識が依て以て働く材料の部分であることを、承認せねばならない。是れはマルクスがフォイエルバッハに關する彼のテーゼンに於て、又彼の「獨逸イデオロギー」に於てとれる立場である。何人でも若し感覺は外界の其の儘の複寫であり、又感覺は夫れ自身で知識を與へると信んずるならば、其の人は宿命主義及び器械主義から脱却することは出来ない。

今以上引用せるフークの論述によりて、エンゲルスが少なくとも晩年に至るまで、マルクス主義哲學の最も重要なる彼の著作に於て主張して居た認識論 又レーニンが彼の哲學上の最大著作「唯物論と經驗批判論」に於て、エンゲルスに従ふて唱道して居た認識論、即ち認識に於ては感性は全く受動的に作用するだけであつて、感覺は外界の事物を其の儘に反映するものであると見る認識論は、マルクスが斷然排斥せる舊直觀的觀照的受動的認識論の遺物であつて、マルクス自身の認識論の眞義と一致して居ないものであることは、明かに學ばれると思はれる。<sup>(1)</sup>

然るに今マルクスが、フォイエルバッハに關するテーゼン中に論述して居る彼の認識論の原理の眞義は、上に述べしが如きものであるとすると、即ち認識の主體としての感性的人間は本來全く受動的なものでなく、何れかの意味にて本來能動的なものにして、そして彼は感覺其物をフークの解するが如きものと解して居たのであるとすると、吾人の哲學的思索は其の點で満足して完全に安息し、敢て夫れ以上に進んで推究しようとはしないであらうか。マルクスの如く只今日のプロレタリアト、殊に現階段の労働者の革命運動の世界觀としてのみ、哲學の眞義を認

(1) そうして私はマルクスの認識論原理の眞義は、大體上フークが解するが如きものと認めるのが、比較的最も穩當であらうと考へる。併し右のフークの解釋は彼の創見ではなく、伊太利 Bologna 大學の教授 Rudolf Mondolfo が1912年に公にせる著書 Il materialismo storico in Federico Engels の中に、既に詳しく論述して居るものに多少の修正を加へたに過ぎないのである。私は此處に先づ Mondolfo の説を述べた後に、

めるに止まらんとする以上は、人間の認識論的活動性、能働性の究明をも其の點で止めてよいかも知れない。併し世界觀としての哲學は、只人間の一部分、(タトヒ比較的により大なる部分であるにせよ)に對しての問題であるだけでなく、人間全體に對する問題であると考へるに於ては、吾々は到底人間の認識論的能働性の究明をもマールクスの止めた點で止めることが出來ず、更に夫れ以上に推し進めて行かざるを得ないと思はれる。そうして夫れ以上に推し進めて行くと、現實なる人間は認識論的考察に於ても、本來只感性的存在であるに止まると見るのは偏見であつて、其の感性的存在の奥底に、或は其の感性的存在と相伴ふて、人間の精神的存在をも認めなければならぬと思はれる。尙ほ夫れより遡つてマールクスが行動の主體と見る感性的人間に於ても、ヤハリ其の感性的存在の奥底に、或は夫れと相伴ふて人間の精神的存在を認めなければならぬと思はれる。要するに私はマールクスが一般に觀念論に於て發展された人間の能働性、活動性、實踐性の思想を、根本的には人間を行動に於ても認識に於ても、全く受働的なものと考へて居た唯物論と結び附けて、實踐的唯物論と云ふ新しき哲學の方針を立てようとしたことは、彼の當面の目的たるプロレタリアト革命の理論及び實踐と云ふことを離れて、純粹に哲學史上から考察するも、甚だ興味ある又斬新な哲學的企だてであると思ふ。併し夫れはタトヒ現代人の一部分の哲學的欲求を満足させるものであるとしても、少なくとも吾々の要求するだけ哲學的思索を徹底させたものでなく、隨ふて吾々の哲學的欲求を十分に満足させるものでないのである。(私は、此の點に付てカナリ

本論文を書き始めたのであるが、既に規定の頁數を超過して仕舞ふたから、已を得ず他日の機會に譲り、此處で擱筆する。尙ほ私は此の第四節に於て論述したことを、もつと詳しく、且つもつと組織的に論述せる一論文を、他日公にしたいと思ふて居る。昭和八年

十一月二十日)

の解釋を述べたつもりであつたが、餘白がない爲め Mondolfo の説の叙述は全く省いたのである。